

埴原和郎先生を送る

尾本恵市（人類学教室）

埴原先生が人類学第一講座を担当されるため東大に着任されたのは、15年前の昭和47年の夏であった。それはついこの間のことのように感じられ、今さらながら月日の経過の早いことを思いしらされる。先生のご出身は山梨県であるが、東京の成蹊高校から東大理学部人類学科へ入学され、昭和26年に卒業されている。昭和31年に東大の大学院博士課程をおえられるとただちに札幌医科大学の法医学教室に講師として迎えられ、33年には助教教授となられた。結局札幌にも15年おられたことになる。

先生のご専門は自然人類学、とくに歯の形態学および多変量解析法による集団の近縁性の研究である。ともすれば単なる記載と個別的比較におわりがちだったわが国の形態人類学に数値解析という新しい活力をあたえられた先生の功績は大きい。大学院時代、ちょうど朝鮮戦争の頃であったが、たまたまアルバイトで米軍戦死者の遺骨の個体識別に大変苦勞されたことがのちの先生のご研究の方向を決定づけたようである。このことは先生の初めての著書である「骨を読む」（中央公論社、1965年）にいっきと描かれている。ちなみに、この本は多感なひとりの青年学徒が、バラバラになった無数の人骨を個体に復元するため悪戦苦闘するなかで、自己の学問への道を探っていくという感動的な記録で、おせじぬきで名著といえるものである。先生の学位論文のテーマ「判別函数による人骨の性差の推定」は、この経験から生まれたものである。札幌へ行かれてから、米国やオーストラリアへのご留学をふまえて、先生は歯牙人類学、つまり歯の形態の人種差や進化の研究に打ち込まれ、この分野の第一人者となられた。

昭和41年より3年間、国際生物学事業（IBP）

による特定研究に参加する機会があり、私は毎年北海道でのフィールド・ワークで埴原先生とお会いできるのを楽しみにしていた。研究対象こそ骨や歯といった硬い組織であるが、日常生活では先生はなかなかの“軟派”で、私ども若手は先生に人類学の話をお聞きするのにかこつけて、なにかというと“すすき野”へ連れて行っていただいた。また、先生は大変な愛犬家で、当時はビーグル犬をなん匹も飼っておられた。たまたま私がネコずきだったため、ある晩飲みながら、先生とおおまじめでイヌだネコだと大議論になり、周囲の人をあきれさせたこともあった。無論、このようなことは例外で、おおかたの話題は人類学のこと、とくに日本人形成論についてであり、この頃先生と話合った経験はのちの私の学問的発展にとっても大いに有益であった。

東大に戻ってこられてから、先生はいち早くコンピューターによる数値解析を人類学に取り入れられた。それまで眠っていた全国の人骨標本の計測資料について多変量統計解析法により様々な時代、地域の集団の比較を行い、日本人の形成に関する多数の著作をものされた。従来、日本人の形成に関しては、大陸からのヒトの移住をどの程度と考えるかにより、「混血説」と「時代変化説」とが両極にあったが、これらは主に直観的でナイーブなものであり、数値的な分析にもとづくものではなかった。埴原先生は、この問題にはじめて数値分類の手法を適用され、混血説の立場を明らかにされている。

人類学教室の主任のほか、昭和58年には総合研究資料館館長に、また昭和59年より日本学術会議会員となられ、先生はますます多忙となられた。私共の心配は先生のご健康であった。高血圧のほ

か痛風になられたこともある。また、数年前、先生は白内障のため両眼の手術をうけられた。私共が心配したのは、手術後まもない時にも先生は、夜おそくまで愛用のパソコンの前に座られてご研究に余念がないことであった。幸い、全快されたからよかったが、あのようなことを医者が許すはずがなく、先生の研究熱心さには敬服させられる。昭和62年度より、京都の国際日本文化研究センタ

一の教授に任ぜられ、東大の方は併任となられたので、数日おきに京都と東京を往復される日程が現在つづいている。先生はこの新設のセンターに大きな期待をもたれ、お見掛けするところでは超多忙のなかにも実に充実した毎日のようである。先生にとっては忙しいほうが健康によいのかも知れない。今後共、先生の益々のご活躍を期待している。